

編 集 後 記

今年の梅雨は実によく降った。台風四号は夏に入る前から、はやばやと東京に史上第二番目とやらの大雨を降らせ、近畿地方や関東地方に豪雨の被害を残して洋上に去った。小河内ダムが乾上り東京が水ききに陥ったのが、ついこの間と思っていたが、小河内が満水し対策が出来たと思ったら今度は豪雨の被害をうける。まことに皮肉なものである。

一方では交通事故が既に新記録をつくっているとかで、人災も派手に襲来している。

このように天災、人災が相次いで訪れ記録をつくっているが、わが国で発見される早期胃癌の数も史上最高の記録をどんどん伸ばしているものの一つではなからうか。

早期胃癌の発見こそは、いくら数が増えても迷惑どころか喜ばしい限りで、大いに結構なことである。

本誌では毎号すばらしい早期胃癌症例が、数多いカラー写真とともに読者の目を楽しませているし、また掲載論文もそれぞれすばらしい持味をもったものである。今後は、ますます内容を充実して臨床に役立つ有用な雑誌に大きく育つことが期待される。

またこの雑誌は胃と腸の名の如く、腸に関する論文やこれと密接に関連のある関連領域の論文も漸次掲載される筈で、この雑誌が消化管を中心としたすばらしい雑誌に育つかどうかは一に全国の関係各位の強力な援護があるかどうかにかかっているので、御理解ある協力をお願いする次第である。

この秋には秋の諸学会が相次いで開催されるが、なかでも国際癌学会、国際消化器病学会、国際内視鏡学会等の国際学会が相次いで開催されることになっている。

最近の日本におけるこの領域の研究が直接に世界の知識と、交流し日本におけるこれら領域の実態を世界に知ってもらいよい機会である。この機会に、今度は世界に向っての新しい飛躍を望みたいものである。

<城 所 功>